日本学術会議　国際対応分科会　自己点検報告書

国際対応分科会（小委員会）名　IUNS分科会　　更新日　2012/9/28
(2009/05/01の形式)

国際学術団体に関する事項

国際学術団体名
（和文）　国際栄養学連合
（欧文）　International Union of Nutritional Sciences
（略称）　IUNS

日本学術会議加入年（西暦）　1966 年

運営組織の名称・役員の構成等
運営組織の名称（欧文）　International Union of Nutritional Sciences

	会長	会長代理/次期会長	副会長	事務局長
（氏名）	I. Elmadfa	A. Lartey	L. Allen	R. Belahsen
（国）	オーストリア	ガーナ	米国	モロッコ

役員選出方法の概要（120文字程度で記載）

4年に1回開催される国際栄養学会議（ICN）時に開かれるIUNS総会において、加盟各国の代表（1名ずつ）による投票で選出する。2009年９月の総会で次期会長にElmadfaが選出され、2010年に新体制に移行した。

加入国・地域の数　80 ヶ国
主要加入国（10ヶ国程度を列挙）

米国、チリ、ブラジル、英国、スペイン、オーストリア、ガーナ、オーストラリア、中国、韓国、日本、

国際学術団体のホームページURL　http://www.iuns.org.htm

国際学術団体の年間運営経費　$360,000
日本の分担予定額[事務局で記入]　365千円（2012年度）

国際学術団体の活動状況

総会・学術研究集会の開催状況（過去10年間・開催年の新しいものから順に5件まで記載）

開催年（西暦）	会議の名称	開催地	参加者数	日本からの参加者数	学術会議共催/協賛の有無
2011	第11回アジア栄養学会議（ACN)	シンガポール	1050	200	無
2009	第19回　国際栄養学会議（19th ICN)・IUNS総会	バンコク（タイ）	4000	300	無
2007	第10回アジア栄養学会議（ACN)	台北（中華民国）	1500	230	無
2005	第18回　国際栄養学会議（18th ICN)・IUNS総会	ダーバン（南アフリカ共和国）	2100	30	無
2003	第9回アジア栄養学会議（ACN)	ニューデリー（インド）	1350	不明	無

運営に関する会議の開催状況（過去10年間・開催年の新しいものから順に5件まで記載）

開催年（西暦）	会議の名称	開催場所（機関等）	参加国数	日本からの代表者名	学術会議の代表派遣数
2011	IIUNS/FANS合同ミーティング（理事会）	シンガポール（IUNS／FANS）	大会参加国数 37	宮澤陽夫（IUNS分科会副委員長/FANS理事）	無
2009	IUNS総会	バンコク（タイ）	大会参加国数 37	宮澤陽夫（IUNS分科会副委員長）	1
2007	IIUNS/FANS合同ミーティング（理事会）	台北（IUNS／FANS）	大会参加国数 37	本間清一（IUNS分科会委員）	無
2005	IUNS総会	ダーバン（IUNS）	大会参加国数 92	門脇基二（栄養・食糧科学研連委員）	1
2001	IUNS総会	ウィーン（IUNS）	大会参加国数 113	安本教傳（会員。栄食研連委員長）	1

出版物等（主要な定期刊行物・不定期刊行物を刊行頻度とともに箇条書きで記載）

①International Nutrition Foundationによる「Food and Nutrition Bulletin誌」の刊行を国連大学（UNU）・国連の栄養常置委員会（SCN)とも協力して行っている（年に4回発刊）。
②主催する国際会議International Congress of Nutrition（ICN)のProceedings（4年に1回）など

活動状況(各項目につき過去5年間の状況を120文字以内で記載)

国際機関等の提唱で行った活動
国際機関等への提言等
WHO(世界保健機構)が中心となっている国連の栄養常置委員会 (SCN)との共同ワークプランとして、栄養失調の防止、小児の肥満制御などに対する学術研究の方向性について提言を行っている。
国際事業等への参加・実施等
IUNSはICSU(International Council for Science)の１部門であり、両者はUNESCOの一部でもある。また、UNICEFと連携した活動も多い。「Diet nutrition and long-term health」「Nutrition in transition」など9つの特別委員会を作って国際的に学術活動を進めている。
全世界的/地域的研究課題への取組み
「Eco-nutrition」「Evidence-based nutrition」などの新しい特別委員会が活動中である。また栄養学における次世代リーダー育成を目指し、国際ワークショップ"Capacity and Leadership Development"が2007年よりアジアで開始された。中国、韓国に続き、2010年には日本で開催した。
発展途上国への対応
2004年に中東・北アフリカ栄養学会を設立し、中央アフリカの栄養欠乏問題解決と優先的食糧供給のための国際的栄養システムの構築を急いでいる。また途上国全般への対策として「栄養失調の予防と制御」特別委員会を組織し、解決のための多方面からのアプローチを進めている

関連学術分野の動向と今後の重要課題(120文字以内で記載)

栄養不足～過剰栄養、妊婦～幼児～成人～高齢者までの広範囲の栄養学を見直す流れが加速しており、Eco-nutritionも重要課題とされる。

国内における国際学術団体への対応状況

国際学術団体の役員就任状況（過去10年間・新しいものから遡って5件まで記載）

国際学術団体における役職名	氏名	任期	
		開始年	終了年
Fellow	板倉弘重	2009	2013
Fellow	野口　忠	2009	2013
Fellow	菅野道廣	2005	2009
Fellow	安本教傳	2005	2009
Council	小林修平	1997	2001

学術会議の国際対応分科会（小委員会）名　IUNS分科会

学術会議以外の国内対応組織・委員会等

特になし

国内の関連学協会等の状況（主要なもの5件まで記載）

学協会の名称	会員数	学協会のホームページURL
日本栄養・食糧学会	4100	http://plaza.umin.ac.jp/~eishoku/
日本農芸化学会	12000	http://www.jsbba.or.jp/
日本栄養改善学会	8500	http://www.jade.dti.ne.jp/~kaizen/index.html
日本臨床栄養学会	1100	http://www.jscn.gr.jp/greeting/index.html
日本ビタミン学会	1200	http://web.kyoto-inet.or.jp/people/vsojkn/

学術会議の国際対応分科会(小委員会)の活動状況

学術会議の国際対応分科会(小委員会)名	IUNS分科会
所属分野別委員会	食料科学委員会(主) ・農学委員会

分科会(小委員会)の構成

委員長	副委員長	幹事	
清水　誠	宮澤　陽夫	武見　ゆかり	

会員数	連携会員数	特任連携会員数
1	5	1

分科会(小委員会)の活動方針(箇条書きで120文字以内で記載)

①IUNSによる国際的な栄養教育・研究・会議開催等の活動を支援する。
②国際活動に関する国内の栄養学関連学協会の協力体制を構築し、IUNS活動の具体的計画を策定・実施する。
③IUNS関連の会議を日本に招致するための活動を進める。

今期の会議開催状況(開催日時の新しいものから遡って６回まで記載)

会議開催日時 (2009/05/01の形式)	主な審議事項・議題等
2012/6/20(第3回)	特任連携会員の紹介。アジア栄養学会議ACN2015の準備状況報告。IUNS若手リーダー育成ワークショップ開催に向けた計画立案。APCCN2013の状況報告。国際栄養学会議ICN2021の日本招致活動の報告。
2012/3/30(第2回)	国際栄養学会議ICN2021の日本招致の戦略。特任連携会員の推薦について。アジア・環太平洋臨床栄養学会大会（APCCN2013＝千葉で開催）との連携について。
2011/12/23(第1回)	委員の紹介と役員の選出。第21期の活動概要の説明。第22期の活動計画として、IUNS若手リーダー育成ワークショップの開催、IUNS役員の推薦、国際栄養学会議ICN2021の日本招致について討議。

日本における国際学術団体の活動の周知・広報の状況(箇条書きで120文字以内で記述)

①本分科会の中心的な支援学会である日本栄養・食糧学会の国際交流委員会と密接に連絡をとり、同学会の理事会、総会などでIUNS分科会活動の進捗状況をアナウンスしている。
②分科会委員には活動の進展状況を頻繁にメールで連絡し、それぞれが所属する関連学会等へ情報を配信するようにしている。

国際対応における国内学協会との連携状況(箇条書きで120文字以内で記述)

①国際集会を栄養改善学会、栄養･食糧学会等と共同開催する準備を進めている。
②アジア栄養学会議2015開催の準備を関連学会と連携して進めている。
③栄養･食糧学会等と連携して国際栄養学会議2021の開催を計画し、招致書類をIUNSに送付した。

特記事項・国際委員会による指摘事項等への対応状況(箇条書きで120文字以内で記述)

①国際対応、医学分野との連携強化を考慮して1名の特任連携会員を加えるなど、今期もメンバーの強化を図った。
②国際的プレゼンスを高めるために、アジア栄養学会議2015の招致に引き続き、IUNS若手リーダー育成ワークショップの再度の日本開催準備、国際栄養学会議ICN2021の招致活動等を開始した。

分科会・小委員会活動の自己評価等(箇条書きで120文字以内で記述)

①特任連携会員を加え、分科会活動を進める上で適切な委員メンバーを擁する分科会を組織できた。
②Iアジア栄養学会議(ACN2015)の日本開催に向けて具体的な準備が進んでいる。 また前期に引き続いてIUNS若手リーダー育成ワークショップの開催を計画するほか、ICN2021の招致手続きを完了するなど、着実な活動が出来ている。